

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その二十二）

海老沢 敏

十二、幼な子の歌《むすんでひらいて》（承前）

明治時代から長い間歌いつづけられてきた讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》が、昭和年代に入ってからようやく教会で歌われる公式の聖歌としての地位を失ない、教会堂の内部空間を鳴りひびかせることを罷めたのと裏腹に、幼な子の歌としての同じ旋律、すなわち《結んで開いて》が、より幅広いかたちで全国津々浦々に普及していったのが、昭和一桁代の後半から昭和十年代であった。その昭和十年代のなかばに、すでに第三章（三、小学唱歌《見わたせば》）で紹介したように、遠

藤宏による貴重な資料発見すなわち伊沢修二の《唱歌略説》（東京芸大稿本）の再発見とその発表がおこなわれている。（注11）この事實は、また明治時代における《ルソーの夢》のもっとも典型的なかたちであった《見わたせば》が歴史的な存在としてあらためて姿を現わしたことを象徴的に物語っているといえよう。遠藤宏の発見は、また《見わたせば》が《ルソー作曲》であるとすする伊沢修二の解説を一般に知らせる可能性を含むものであった。《ルソーの夢》の旋律が《ルソー作曲》であるという情報は、すでに明治三十年代なかばに、わが国のキリスト教界、それも新教界を中心としては紹介され、大正年間から昭和はじめにかけて、《讚美歌》が教会で用いられている間に新教信者のあいだでは少なくともひ

らまっていたと考えられる。だが、それが私たち日本人全体のあいだで常識であったとは考えられないのである。

(注11) 遠藤宏《音楽取調掛最初の演奏会史料(明治音楽史稿)》

(東京音楽学校校友会雑誌《音楽》第二〇号、昭和十五年、

五ページ—二〇ページ)

その根拠をいくつか挙げてみることにしたい。第一章(一)、『むすんでひらいて』とルソー)で最初に紹介した園部三郎氏の音楽家ルソー論の初稿としての《音楽史に於けるルソーの地位》^(注12)

(昭和十一年)には《見わたせば》あるいは《結んで開いて》と

ルソーの関係ばかりでなく、讚美歌としての《グリーンヴィル》

とルソーの関係についてもまったく言及されていない。四年後の

遠藤宏の新資料発表も、発表機関が音楽学校の同窓会報というこ

ともあって、あまり一般には顧みられることがなかったのである

う。したがって、《見わたせば》ルソー作曲説がひろく人びと

に意識されていたのは、第二次世界大戦後の昭和二十三年に遠

藤宏著《明治音楽史考》が刊行され、《唱歌略説》の紹介が再録

され、かつ、《歌曲の戸籍》でその注解が発表されてからのこと

であったと考えられる。^(注13)

(注12) 園部三郎《音楽史に於けるルソーの地位》(《音楽評論》

第四卷第七号(昭和十一年五月号)、第九号(同七月号)、第一

〇号(同八月号))

(注13) 遠藤宏著《明治音楽史考》(昭和二十三年四月)一一〇

ページ—一一一ページ、および二〇八ページ。

事実、園部論文は昭和二十三年六月に刊行された同氏著《音楽史の断章》に再録されているが、すでに第一章で触れたように、

《むすんでひらいて》の歌詞を掲げ、この歌の作曲家としてジャ

ン・ジャック・ルソーの名を挙げていたのである。^(注14)

(注14) 園部三郎著《音楽史の断章》(三一書房・昭和二十三

年六月)二三ページ。

こうした点で昭和二十三年は記念すべき年であったが、その前

年にあたる昭和二十二年五月十五日に文部省は《一ねんせいのお

んがく》、《二年生のおんがく》、それに《三年生の音楽》と称す

る三冊の教科書を刊行している。この一連の教科書はつづいて五

月三十一日発行の《四年生の音楽》、六月五日発行の《五年生の

音楽》と《六年生の音楽》をもって完結したものであったが、終

戦直後の混乱期の産物であるいわゆる《暫定教科書》を別とすれ

ば、終戦後刊行された最初の音楽教科書であった。昭和二十二年

三月三十一日には教育基本法が公布され、学校教育法も制定さ

れ、戦時中の国民学校初等科はふたたび小学校として再発足し、

学習指導要領の作製と並んで、文部省の編集になる小学校一年か

ら六年までの音楽教科書の製作が試みられたものである。いわゆる義務教育六・三制中の小学校六か年のためのものであった。文部省は小学校教科書編集要員として次の四氏を任命している。^(注15)

岡本敏明（国立音楽学校教授）

平井保喜（作曲家）

小林つやえ（東京高等師範学校教官）

勝承夫（作詩家）

加えて文部事務官の諸井三郎、近森一重の二氏がこれら教科書の編集を推し進めたのであった。それまで文部省内には音楽の専門家は在職していなかったため、外部委員によって仕事がすすめられたのに対し、この新しい教科書で初めて文部省に所属する専門の音楽専門家が編集作業の責任を負うたのが特徴であった。^(注16) その内容上の特徴としては、「この教科書は従来の小学校の教科書とその編集方針が非常に違い、外国曲を入れるとか、邦人の手に成る既成作品を採用し、またはじめて作詞者、作曲者の名を明記した」ことが挙げられる。^(注17)

(注15) 井上武士著《音楽教育明治百年史》（音楽之友社・昭和四十二年）一五〇ページ。

(注16) 同右書、一五一ページ。

(注17) 同右書、一五一ページ。

▼ 図版 ①

一ねんせいのおんがく
Approved by Ministry of Education
(Date Apr. 22, 1949)

昭和22年4月18日	初刊発行
昭和23年1月20日	修正版発行
昭和24年4月22日	改訂版印刷
昭和24年5月15日	改訂版発行
【昭和24年5月15日 文部省検査済】	

定価 金15円90銭

著作権所有 文 部 省
東京都文京区久野町108番地

印刷発行者 日本書籍株式会社
代表者 木村 淵之助
東京都文京区久野町108番地

印刷者 共同印刷株式会社
代表者 大橋 芳雄

発行所 日本書籍株式会社



▼ 譜例②

♩ = 104

むすんでひらいて

作曲 木下尚江
作詞 木下尚江

ひすんでひらいて

てをうってむすんで

またひらいててをうって

そのてをうえに

ひすんでひらいて

てをうってむすんで

— 12 —

— 13 —

新教育制度発足後最初の音楽教科書であり、かつ、〈文部省著作教科書〉としては唯一のこの六冊の小学校用教科書の第一冊としての《一ねんせいのおんがく》(図版①)には合計二十二曲の歌が収められているが、その第三曲は《ちようちよう》、そして第四曲は、ほかならぬ《むすんでひらいて》なのである。いずれもその旋律は明治初年の《小学唱歌集 初編》以来、私たちにまことに親しみ深いものであり、さまざまなかたちで私たちの父祖の時代からくりかえし反復されてきたものであった。そしてほかならぬ《むすんでひらいて》は、この遊戯唱歌としての歌詞によって、はじめて小学校用の唱歌のひとつとして位置づけられるにいったのである。その歌詞と楽譜とをあらためて掲げてみよう。

(譜例②)

「 四 むすんで ひらいて
むすんで、ひらいて、
てを うって、むすんで、
また ひらいて、
てを うって、
その てを うえに。
(その てを したに)。
むすんで、ひらいて、

てを うって、むすんで。」

ハ長調、四分の二拍子、♩₄104のこの曲譜には〈作詞 不明、作曲 外国民謡〉を謳われている点が私たちの注意を捉えることだろう。〈むすんでひらいて〉のテキストが、すでに明治四十年代から記録されていることは紹介したが、作詞者が誰か、あるいはこのテキストが一体何から由来したものかについては現在においても明らかでない。〈一ねんせいのおんがく〉で〈作詞 不明〉としたのはこうした事情を物語っている。これに反して楽曲の由来について〈作曲 外国民謡〉としたのは意識的なものであったろうか。編集委員の中には故岡本敏明教授のごとく讚美歌に通暁しておられる存在も含まれており、〈グリーンヴィル〉としてかつてキリスト教界で親しまれていたこの旋律が〈ヘルソー曲〉と謳われていたことを知っておられたはずだからである。

しかしながら、一方では、〈ヘルソー作曲〉説が楽壇をはじめとしてひろく一般で紹介されたのはあくる昭和二十三年のことだという事情があることもすでに述べた。こうした状況は、この文部省唱歌としての〈むすんでひらいて〉のその後の命運ともつながりをもっていくのである。

〈むすんでひらいて〉は、くりかえし述べているように、明治

末年以降、遊戯唱歌として、しだいにひろく子供たちの世界に浸透して、すでに誰ひとり知らぬもののない〈幼な子の歌〉として親しまれていた。それだからこそ、また小学校初学年の歌として、文部省教科書に採用されたものであったろう。こうしてこの〈幼な子の歌〉〈むすんでひらいて〉は、このあと〈文部省唱歌〉と謳われることになるのである。譜例②にみるようにこの教科書版の〈むすんでひらいて〉にはピアノやオルガンで演奏できる伴奏譜がつけられている。このかたちは、この歌が幼児のためのピアノ曲、オルガン曲として普及していくのも促したものであった。現在、〈むすんでひらいて〉は、〈幼な子の歌〉、〈幼な子の曲〉として、まことに多様なかたちでひろまっているというべきであろう。つづいて、そうした点を整理してみよう。

現在市販されている童謡集や唱歌集にはかならずといってよいほどこの曲が収録されているが、その大部分は旋律線だけを掲げ、かつ、ほとんど一様に〈文部省唱歌〉と謳っているが、あるいは〈作詞者不詳・ルソー作曲〉^(注19)としている。

(注18) 〈たのしい子供達の楽譜集〉(木琴・笛・ハーモニカ・卓上ピアノ・オルガン用) ① (全音楽譜出版社)

〈楽しい唱歌〉(成美堂出版)

高木東六編《日本童謡集》《音楽新書》(成美堂出版)等

(注19) 三瓶政一朗編《日本童謡全集》(音楽之友社)

三瓶政一朗編《日本唱歌全集》(音楽之友社)

谷川俊太郎編《童謡・唱歌集》(日本の詩28)、集英社)

《むすんでひらいて》を収めているのは、童謡集や唱歌集ばかりではない。幼児のためのピアノ曲集やオルガン曲集にも必ずといってよいほど収録されているほか、保育用の文献、すなわち幼稚園や保育所の指導用の文献には収載されていることが多い。^(注20) 児用のピアノ曲集の場合、その多くがハ長調、四分の二拍子をと^(注20)り、また《むすんでひらいて》のテキストがつけられている。また曲の由来については、約半数には《文部省唱歌》と記されている。一方ヘルソー作曲》と指示されているものもかなり多く、その他に《フランスのうた》と記されているものもある。これは昭和二十年代なかばから今日にいたるおよそ三十年間に、《むすんでひらいて》ルソー作曲》説が日本楽壇、そして日本の社会に定着してきたことを物語っているものといえよう。

(注20) ここでは調査のためにピック・アップした曲集名と編者名、出版社名を掲げておこう。

① 《よい子を選んだ童謡ピアノ名曲選1》(青山梓編) 音楽春秋

② 《保育音楽のための幼児歌曲集》(保育音楽研究会編著)〔保

育音楽シリーズ2〕共同音楽出版社

③ 《保育音楽のための行進リズム曲集》(保育音楽研究会編著)

〔保育音楽シリーズ4〕共同音楽出版社

④ 《保育音楽テキスト》(奥村美恵子編著) 共同音楽出版社

⑤ 《ピアノ・オルガン指導曲集》(長倉一郎編著) 国際楽譜出版社

版社

⑥ 《ピアノ唱歌集》(長谷川千代編) 新興楽譜出版社

⑦ 《こどものための童謡唱歌ピアノ曲集》(長谷川千代編) 新興楽譜出版社

興楽譜出版社

⑧ 《うたいながらひくやさしいピアノ曲集上》(竹田由彦編著)

全音楽譜出版社

⑨ 《ピアノ童謡集 1》(二宮道子編著) 全音楽譜出版社

⑩ 《楽しく学べるバイエル併用曲集 わたしはピアニスト》(田

中雅朗編) 全音楽譜出版社

⑪ 《こどものための童謡曲集かわいいタレント 5》(井上元

編曲) 東京音楽書院

⑫ 《バイエルをはじめから》童謡ピアノ撰集 1》(井上

元編曲) 東京音楽書院

⑬ 《ちいさい手のためのピアノ・サイド・ブック 1》(渡辺

麗子編) 東京音楽書院

⑭ 《バイエルのあいまに》(渡部麗子・橋内良枝編) 東京音楽書院

⑮ 《みんなのすきなピアノ小曲集》(橋内良枝編) 東京音楽書院

⑯ 《ちいさなピアノリスト》(橋内良枝編) 東京音楽書院

⑰ 《たのしい幼児のピアノ教室》(山本雅之著) ドレミ楽譜出版社

版社

⑱ 《レッスンを楽しくする本(ぬりえつき) ピアノさんあそび

まじょう》(山下希夫編著) ドレミ楽譜出版社

⑲ 《やさしく・たのしいよい子の童謡ピアノ曲集 1》(金子

卓郎編) ドレミ楽譜出版社

テキストの点でつけ加えておくならば、注20の⑳に収められた

《むすんでひらいて》には英語のテキストがつけられている(譜

例③)。

I'm so happy, I'm so happy,

I'm so happy, happy all the time (day).

《むすんでひらいて》のテキストであまりにもよく知られている曲ではあるが、こうしたやさしい英語のテキストで歌われ、遊戯される時、また別の味わいが出てくることだろう。

保育関係文献の場合、《むすんでひらいて》には遊戯の仕方が指示されているのが普通である。ここではもうひとつ別の文献に

よって、《むすんでひらいて》の遊戯指導の実例をひとつ紹介してみよう。板野平著《リトミック・ブレイルーム》^(注21)は有名なダルクローズのシステムによるリトミックの立場から、幼児の遊びの中にこの《むすんでひらいて》をも位置づけているが、この曲は三歳児から五歳児におよぶ数多くの遊びの中で、四歳児の第一曲に置かれている。

「四歳児 むすんでひらいて

☆ねらい

歌の拍子に合わせて、手を動かしたり、歩いたりさせて拍の感覚をつけます。その後《へくろ》のリズムカードに結びつけて、読譜力を養います。

☆遊び方

① 《むすんでひらいて》を歌わせる。

② 歌詞に従って動作をつけ遊ばせる。

③ ②の動作を歩きながら行なわせる。

④ 《へくろ》のリズムカードを見せて、今まで《タンタン》と打ったり、歩いたりしたリズムは《へくろ》のリズムであることを教える。空中にまたは床上にいくつも《へくろ》を書かせる。

☆留意点

《へくろ》の速さがおそくならないように、適度な速さを選ぶこ

▼ 譜例 ③

ふがんわひらいて

ルソ-作曲

Andantino

I'm so - hap-py, I'm so hap-py, I'm so -
 hap-py happy all the time. *Fine.* I'm so - hap-py,
 I'm so hap-py, I'm so - hap-py, happy all the time. *D. C.*
 (day)

とに注意してください。(注22)

(注21) 板野平著《動きのためのピアノ即興演奏法―リトミック・ブレイルーム》(実用保育選書 11) ひかりのくに株式会社

(注22) 同右書、六八ページ。なお、〈くろ〉音符とは四分音符のことである。

《むすんでひらいて》のテキストが指示する動作は、手の動き、それも幼な子たちにとってもっと基本的な開閉運動や上下運動、さらには打拍運動からなっている。それはまた幼な子たちのもつとも初源的な遊びの基本的な形態でもある。ここでは、まず旋律を歌い、歌詞を歌うことで、この曲は幼な子の記憶の中に刻み込まれ、その曲が幼な子たち自身の声で再現されながら、幼な子みずからの身体運動の中で、まさに体现されるのである。この身体運動が歩行活動の中でさらに展開されるが、さらに幼児たちが学ぶものはそれにとどまらない。楽譜の基本的要素である音符(四分音符)が、具体性をもって習得されることが意図されているのである。

(国立音楽大学)

(つづく)